

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
6月号

毎月23日発行
通巻454号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成20年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



ムクゲの葉をかじるラミーカミキリ 井手 泉さん撮影(文・7頁)

昭和38(1963)年6月23日 月次祭法話より

大倭の宗教が目指すところ

法主 矢追 日聖(満51歳)

教修会の意味

梅雨の最中ですが、今日は朝からカンカン照りです。拝殿の中は暑うございますから、うちわでも扇でも使つて、どうぞ楽な姿勢で話を聞いて下さい。昨夜は月次祭の宵祭りとも言えるんですが、この拝殿におきまして教修会を開きました。これは毎月の行事でして、足元から大倭の宗教に基づく人づくりをしていこうという、大倭一門の者の集まりです。晩の八時から始めまして、お互いに話し合い、終わったのが夜中の三時でございました。それでまた今朝は早起きしてくれておるんです。

大倭では、現在三十人余りが一つの所帯でもつて集団生活を営んでおるわけです。こういう形で生活をしている所はそんなにありません。例えばこの近くでは、俗に白い共産部落と言われている奈良県榛原の心境部落。それから数年前に新聞で騒がれていたこともあるんですが、山岸会というのが現在もやっております。それと大倭一門と、関西には三つあります。全国的には、青年達が共同出資、共同経営、共同生活で農業や酪農を目的としてやっておる集団等もあります。そういう中において、我々は大倭の宗教に基づいて、言い換えれば大倭主義に基づいて、家庭の一個人の問題から出発し、社会や国家、世界の問題にまで押し広げ、日常生活における行動をしておるかどうかを反省し、お互いに色々と研究

するため夜中の三時まで時間を費やすことになってしまったわけです。このことは大倭一門だけでなく、大倭に来られる皆さんにも、同じ一つの心境でいて頂かなければならないんですね。

宗教が何故必要か

大倭の宗教とは何ぞやということになりますと、非常に範囲が広うて、一言では答えられない難しい問題なんです。だから、宗教そのものが何たるかは別として、どんなものを宗教と言うか、宗教が我々人間生活の中において何故必要であるかを話したいと思います。

いわゆる知識階級とでもいうのか、そういう人達でも日にちの生活から世の中の全てのことを、人間の知恵、即ち科学によって割り切ることはできないんです。

しかし、中には科学が万能だと解釈している人もおります。確かに科学で万事解決して、一生、喜びや満足を持って幸せに暮らせるような社会であれば、宗教は必要ないわけです。

この間もソビエトの女性が人工衛星で地球を一周したというニュースがありました。それほど物質文化が進んでおるんだから、もし一切が科学の力で割り切つていけるのであれば、世の中は非常に安定します。それに越したことはない。ところが、これだけ医療も進歩しておるのに、現実問題として、私のような者のところへ、「この病気は何やる？」と聞きにくる人がおるんです。

大学を出ても社会の矛盾に悩むと、成績優秀であった者がノイローゼにおちいるという実例もよくあります。今まで一番頼りにしておった知識科学というものに、力が無かったという現実直面するからなんです。現代社会には割り切れない

問題が、あまりにもあり過ぎるんですね。

今ここにも、女の人がおるかと思えば男の人がおり、若い者も中年も年寄りもおる。女と男があるから色々な問題が起きると文句を言うて、科学の力で中性の人間を拵えようとしても、大自然によって仕組まれていることを、人間の力ではどうもできない。

オギャーと生まれた子供が一年経ち、三年経ち、だんだんと知恵が付いてくる。十八、十九にもなつてくると教えなくても勝手に色気が付いてくる。二十四、五になると夫婦になりとうなつて所帯を持つ。そうこうしている内にまた子供ができて親になつていきます。そのうち、だんだんと私みたいに白髪が生えてくる。もう棺桶の用意せなあかん。焼き場でポーツと焼かれて灰になる。人生はそんなことを繰り返しているんやね。

人間の頭で考えれば、二十歳ぐらいで生まれて年寄りにならん間に死ぬくらいがええかなと思っけど、科学がどれだけ進歩してもそうはいかん。人間の肉体一つをとつても、何故死んでいくのか科学では分からない。若くても病気になるって死ぬ。科学が万能であれば死ぬはずはないんです。

科学を心のより所として人生を送つた場合には、実に不安定な社会であつて、不安の連続なんです。そこで我々は何を人生の心のより所とするかが問題になつてくるんです。科学で及ばないところの一步進んだ世界、それが宗教の世界観なんです。

生きているのか、生かされているのか

我々は人間というものの根本を調べなければならぬ。割り切れない事実があるということとは分かるんだけど、それが何であるかを、科学で

もつかめないものがあるんですね。

例えば、人間は生まれた時に死ぬことも分かっていいます。それでは、我々は自分の力で生きていくのか、天地自然の力で生かされているのかという問題があります。自分で勝手に生きていくんだつたら、百歳でも二百歳でも生きたらいいんですよ。ところが七十になり八十になり、老いぼれてコトツと死んでしまう。やはり生かされておるんです。生かされておるその力は何か。これは、科学で証明できないと思うんです。顕微鏡で見付からないけれども、事実として在るということに分かるんです。

そういうように必ず変化していくことに対し、「かんながら」という言葉を使います。「かんながら」を科学の力でくい止めることも、否定することもできない。けれども目に見えない何かしらの力によって、我々はそういうふうになつていくことだけは分かる。それが宗教の世界なんです。理屈抜きの世界なんです。理屈を言いたいとか、知識で割り切つて覚えようという段階は、まだ科学なんです。言い換えれば哲学、心理学の世界と言えるんです。

我々人類というものは、何かしら訳の分からない、ボヤボヤとした世界を頼らなければ安心して暮らせないような、難儀な動物に生まれ合せてきています。だからこそ宗教が必要なんです。手を合わせ、神様に対して信仰をするという結果も出てくる。

神様と言うより表現のしようがないような、宇宙に存在している一つの大きな気が元々から在るんです。宇宙の根本エネルギーだと言つてもいい。どんな言葉を使つても、その実体は説明できないけれども、事実として在るんや。そういうものの中から全て、人類も動植物も生まれてきてい

です。

その根源の力に対し、我々は絶対的に頼らなければならぬ。頼らないと思つてみても、その力に支配されているのは事実なんです。意識して心臓を止めようと思つても止めることはできない。まあ普段は、心臓が動いているか止まっているかなんて問題にしていない。それでも心臓は動いています。あるいは、息を吸ったり吐いたり呼吸をするのでも、一つも意識しないでやっています。いわゆる自律神経を通して、心臓や呼吸の機能を動かしている。その根本の力というものを、科学では説明できない。だから、我々は「加美」（※こういう場合、法主様がよく使われた万葉仮名）と言っているんです。

仏像は芸術作品

加美さんは、宇宙の大霊と言つてもいいんです。そういうつたものを指して、大倭の宗教では「太加天腹大神」というお名前前で言い表しております。お寺に行けば阿弥陀さん、あるいは観音さん、不動さんと色々な木仏（かみぶつ）金仏（かねぶつ）が祀られています。それを自分の信仰の対象として手を合わせて拝んでいる人が多いです。偶像崇拜の宗教はたくさんあります。しかし、偶像というのは人間がこしらえた芸術作品なんだ。一つの品物であつて、それ自体は神さんでも仏さんでもないんです。

私などは、雪隠で加美さんを押んでいます。皆さん笑うけど大小便が出る時、今日は健康や、あ加美さんありがとうと思う。私が加美さんを押む時は感謝するだけなんです。朝起きて、雪隠で加美さんを押むのが一番、結構なことなんや。

御簾を掛けた祭壇とか、あるいは大きなお堂の中で光つておる阿弥陀さんを百万陀羅押んだつて

尻のつっぱりにもならん。けれども、きれいな仏像が並んでおつたら拝みたくなる、賽銭の一つもあげたくなる。これは、信仰の考え方が大間違いなんです。今日までの日本の宗教が、そういうように間違つて教えてきたんです。

不動さんのご利益で、いかなる難病でも治ると言つて護摩を焚いて九字を切る。それに対し一生懸命押む人がたくさんおるんです。ご利益があるのかないのかわらんけれども、そういうようなことが一つの信仰だとか宗教だという風に考えておるんですね。だから、本当の宗教というものが、この世から消えていくんです。そして横道にそれた宗教らしきものが世の中にはびこる。皆さん方も、その点はよく考えなければいけません。

宗教のご本尊というのは、万物一切を生み成し生かしている生々化育の大法なんです。万物一切を生み、生んだ以上は育てていく。そして、散らしていく。散らす代わりに、また生む。というように、大自然は循環しているんですね。太陽は西の山に沈んだと思つたら、あくる日は東の山から出てくるし、また西に沈み東から出る。季節も春、夏、秋、冬と回っている。人間も生まれたら、やがて年老いて死ぬ。その代わり、若い者は子を生んでいく。

宇宙の法則というものは、すべてがクルクルクルクルと回転しているんです。目に見える世界も見えない世界も、皆回転している。これが「かなながら」の法則です。私が創つたものでも何でもありません。元々から在る一つの法ですから、疑つても仕方がない。否応なしに動かされておるんだから、我が個人の力ではどうにかしようと思つてもできないわけです。

大自然の恵みとして、自然の力を借りなければうまくいかない。けれどもね、大自然の大霊の一

部分というのは、人間個人個人の腹の中に入っておるんですよ。宇宙の大霊からの分かれ、それがいわゆる靈魂なんです。我々の肉体を支配し生かしておる生命力と言つてもいい。

みんなの持つている靈魂と宇宙の大霊とは目に見えないもので結ばれております。これが玉の緒です。本社が上にあつて末社がここにあるみたいに繋がれているんです。だから加美さんの働きというものは、我々の日にちの生活の上に見れてくるんです。

自分の中の加美さん

靈魂は、心とも言います。世間の人は、親切な人やとか、たちの悪い人やとか、正直だとか嘘つきだとか、まあ人を勤務評定みたいに評価しております。人の心は、形として目に見えないけれど、その人の行動に現れるんですね。そういう時に、これを宗教的に解釈してほしいと思います。

我々は宇宙の大霊、言い換えると加美さん（＝太加天腹大神）というものに帰依し信仰すると同時に、自分に対しても信仰しなければいけない。自分の肉体はお社なんです。この中に加美さんが鎮座しておられるんです。他所に行かなくても、我がの肉体の中に鎮まつている大神さんに対して、自分から信仰したらいいんです。

これは利己主義や個人主義とは違う。自己の魂即ち心を磨くということなんです。魂の浄化を図つて、現在の自分よりも例え一歩でも向上し進歩した人間になれるように、自ら努めるのが信仰のありようなんです。

神様を押んでご利益をもらつて、病気を治してもらおうとか商売繁昌させてもらおうとかいう信仰は邪道なんです。今、多くの宗教は邪道を平気

で説いておるんです。大倭の場合は、そういうような信仰は一切、慎まなければならぬ。

自分で自分を守りしている、自分の中の加美さんに頼んだらいいんです。自分の魂の動き方によって、自分の病気に打ち勝っていく力が自ずから湧いてくる、そうすれば良い方に変化してくるんですね。当然、医者の方も借りなければいけない。養生法に間違いがあった場合には、それを正しくしていく。

けれどもね、どれだけ医者にかかっても、養生しても、精神的修養をしたかて、寿命がきたら死ぬのは不思議なことではなく、当たり前なんです。これはおめでたいことなんですよ。

大倭の宗教に帰依する人は、「かなながら」の大法によって、その道に努めるという態度であってほしい。だからと言って宗教は理屈ではない、味の世界なんです。この味の世界は、そうたやすく一年や二年、あるいは三年や五年で分かるようなものではない。やはり自分の体験を通してなければ、この味は本当に分からないものなんです。

「かなながら」の味

大倭も、対外的に積極的な宗教活動をしなければいけないんです。ところが、やっぱり時機が来なければ、手をつけることができない。いわゆる、成り行きに任せようということなんです。

宗教的な仕事というのは、消費的なもので生産的な仕事ではないんですね。だからして、経済的な裏付けも必要です。けれども、悩みや迷いを持って来られる信者の資金をあてにしたり、自分の心の修養を目的として集まってこられる信者を対象として金儲けをしたりするのは、人間的向上を指導していこうという大倭の宗教の主旨に逆らう

んです。

かねてから、対外的に積極的な活動をする時機が昭和四十年前後——まあ確実には言えませんが大体今年か来年、あるいは再来年くらいになるということとは、私は分かっております。大倭安宿苑（※昭和31年設立）に入っている人達にもできるような仕事であって、一生を保障してやるようなものを準備しなければならないということも考えておったわけです。しかし、まあ色々な問題があって遅くなっていた。そこへまた今年には隣に登美学園ができました。

そういう中で、何とか金の都合が付き、適任者もそろい、準備が整ったわけです。偶然かどうか分かりませんが、月次祭である今日の午前中に、天王山（※現在、大倭病院のある場所）の敷地において、大倭ブロック製作所の基礎工事が行われました。セメントのブロックは建材として、ここしばらくは非常に必要とされますので、それを製作しようという工場なんです。

これは大倭の宗教が事業主体となっておりますが、純然たる企業でありますので、儲けなければならぬんです。しかし、その利益は宗教活動の財源としてゆく。その企業は、世間にある資本主義的な会社とは、全然違う行き方をするつもりなんです。大倭主義に基づく、「かなながら」の道に沿った組織体にしたというのが念願であります。我々が、世間の資本家に対してどうこう言わなくても、大倭の経営組織を見たらいいという雛型を示すことができるわけです。

大倭の集団生活の実態が、社会改造の一つの雛型であると共に、口よりも実行において裏づけをしてこそ初めて、理論を出していけるというねらいを持っているんです。我々人間が計画したんじゃない。言うに言われ

大倭神宮のアオバズク

今年の初見は、5月23日でした。



▲平成10(’98)年 7月15日

平成9年月日不明▶

野 保夫さん 写

ないところの、自然の成り行きなんです。とにかくここ数年の間に、この場所での時代の向きの仕事をしていく。色々な縦横の関係が一つの焦点に集まってきて、この時機に具体的に発足するという段階になりました。

人間の計画以外において、また計画してもできないような良い結果が生まれてくるというところに、「かなながら」の味がある。我々人間以外の者が計画しておられることが分かるんです。ここが宗教の世界であって、理屈では割り切れないところです。

これはまあ、一つの例でございませうけれども、皆さんも「かなながら」の味というものを心得て、大倭の宗教においては個人の修養、そして人間的な向上を図っていくこと。その点を持って信仰を続けてほしいと思います。 (文責 編集部)

第297回大倭会文化行事報告 H 20・4・20

今城塚古墳と

トマトの水気耕栽培見学

大阪府茨木市 杉 浩史



「春に三日の晴無し」と言う言葉があるが、その日、花が終わったばかりの葉桜は、心を洗うような目映い新緑であった。生来の無精者で、不熱心を自認する大倭シンパの私が、この度の文化行事に参加の意を固めたのは、実は前日であった。明日は天気も良さそうだし、その上、私は全くの地元の人間なのに「今城塚古墳」は、何を隠そう、初見参なのだから……。地元のボーイスカウト隊長歴一〇年を考えれば、余りにも古代の由緒あるお方に不義理なのでは……と思ってもいたからに他ならない。

北摂の山々、そして里山は、殆んどが我がフールドであり、真西へ一三〇〇米の位置（茨木市太田）にある宮内庁管理下の「継体天皇陵」に敬意を表したことは、相当回数に上ると言うのに……である。

さて昨今はこちら「今城塚古墳」こそが真の継体天皇陵であるとする説が有力になってきている。とは言え、片や高槻市教育委員会、片や宮内庁の管轄、まあ、その有り様は、随分と隔たりがある。一方

は磨き上げられた御影石風の石積みの上に、塗装の行き届いた金属柵に囲まれている（確か、その筈だった）が、片方は史跡公園として整備中ということだが、正しく工事現場の仕切り用のツイタテを針金の親方のような番線でつないで囲っているのみだ（写真上）。



（写真）野保夫さん

ま、フェンスが綺麗かどうか、を雲上人が氣にされるのかどうか、は私には判らない。だが「それはそれなりに……」祀られるほうが希ましいと言う風に考えれば、今城塚の無粋なフェンスに違和感を覚えるのは、私一人ではあるまい。

ところで継体とは、直接的にはそれは「天皇の位を継ぐ」と言う意である。それが固有の個体を意味すると言うのも、いかにもケツタイなネーミングだと予ねてから思っていたが、その疑問がこの日、解けることと相なった。必要な時には必要な御仁がいるもので、それは本来のおん名は「男大迹大君」だと解説してくれたのは、私としては日頃からその博学多識を敬愛している同行の林修三さんであった。

継体天皇の鎮座まします御陵がどちらであるかはともかく、形の整っていないものに「祈りを捧げる」のは、非常にやり憎いのだが、何とか個々人が拍手 合掌をして、その場を後にした次第である。私達はよく「形に捉われず、心と誠を尽くそう」となことを言うが、やはり形が整っている方が、はるかにお参りがし易い。何となくバツの悪い、お参りと感じたのは私だけ……？

さてその後、水気耕栽培を研究実践している協和（株）ハイポニカ販売部を訪れ、ひとまず昼食を摂り、ピニールハウス内の「トマトの巨木」を見学し（写真下）、もぎたてのトマト きゅうりをほお張りながら、勇躍、解散……、と思いきや、私よりもっと地元の方の案内で（その方の名は、小栗栖直樹さんとか、私は初対面）、直ぐ近くの闘鶏野神社にお参りをしてお開きとなった。

ホンの少し高台になった神社の境内からは、春霞の向うに生駒山頂を遠望でき、目を細める日元さんの横顔がところを和ませてくれた。

振り返って見るに、何てこともない一日でもあるが、ちよつぱり歩いて、ちよつぱりくたびれ、実に心地よい疲労感。お陰様で、心豊かな日を過ごさせて頂いた次第である。計画をされた方、そして参加をされた皆様に感謝……。

編集部、愛生園へ

今回は秋の大倭会文化講演会の講師、神谷文義さんとの打合わせが目的で、それと前回お会いした時、小田弥市さんの囲碁に対する情熱を強く感じて是非とも、関西棋院の中野泰宏九段に同行して頂きました。



神谷さんには、講演会のタイトルを「交流の家と私」と決めて頂き、小田さんのお家にお伺いしたら部屋には既に碁盤と碁石そして小田さん専用のスポンが用意されていました。スポン？ これは指が御不自由な小田さんが対局するための必需品です。三子での対局でした。写真は右が小田さん、左が中野泰宏九段。（杉本 順一）

大倭あちろちろ (第23回) 奈良市富雄地域 包括支援センター

現在、少子高齢化が進み、後期高齢人口が増加している。そんな中で家族機能は変化し、男女均等社会の到来などにより、介護における公共性（介護は社会全体で担っていく）という課題がより深刻に問われているようである。

一人暮らしの高齢者の増加、老老介護、孤独死家族の介護疲れ等の様々な出来事が連日テレビ番組やニュースで報道されているように社会全体が高齢者介護の必要性に迫られているのがわかる。今回取材した、「地域包括支援センター」はまだまだ世間の認知を得ていないようであるが、二〇〇六年四月に改正介護保険法の実施によって創設されたもので「皆さんの身近な地域で、高齢者及びご家族の介護相談や必要なサービスの申請代行など在宅介護の相談窓口」である。つまり、地域における介護予防の拠点なのだ。

運営主体は市区町村、社会福祉法人等である。基本的に人口二〜三万人に一か所の割合で設置され、二〇〇七年四月末時点で全国に三三三二か所、奈良市内には十一か所設置され、社会福祉士、主任介護支援専門員（主任ケアマネージャー）、看護師、保健師等の職員が専門性を生かして地域の支援活動をしている。

具体的に地域包括支援センターの役割四つを上げてみよう。

①総合相談「高齢者やその家族の皆さんが抱える悩みや心配事など、また地域住民の方など、

何でもご相談下さい。どのような支援が必要かを把握し適切なサービスにつなぎます。また、保健、医療、福祉全体に関する情報提供を行います」

②介護予防マネジメント「要介護認定において要支援1、2と判定された方や介護が必要になる恐れのある方（特定高齢者）を対象に、介護予防サービス（運動機能向上 栄養改善教室 口腔機能向上等の各教室 閉じこもり等の訪問事業等）の適切な実施のためにサービス利用計画（ケアプラン）の作成を行い、サービス実施後に効果を評価し、必要に応じて計画の見直しを行います」。自立して生活できるように支援します

③権利擁護・虐待の早期発見、防止「高齢者虐待への対応、悪質販売訪問等による消費者被害の防止、成年後見制度の活用などにより高齢者の皆さんへの権利擁護をします」

④包括的、継続的マネジメント「地域の多様な社会資源（例、市 社会福祉協議会 民生委員 自治会等）を活用したケアマネジメント体制が構築できるよう、皆さんを支える地域のケアマネージャーの指導や支援をします」。地域のネットワークづくりを通してさまざまな方面から皆さんを支えます。（奈良市保健福祉部長寿社会室介護福祉課による資料参考）

富雄地域包括支援センターは大倭紫陽花邑内の丁度真ん中辺りにあり、地域の方や他事業所の職員の出入りも多い。訪ねると職員全員（六人）参加で取材に応じてくれた。

昨年事務職員となった大山さんは「皆、一生懸命やっています（聞くと一人、五十ケースは受け持つてる）。ここは笑いが絶えないんですよ」という。「サザエさんの家族みたい」と社会福祉士の藤原さん。藤原さんを始め、主任ケアマネージャーの兼田さん、保健師の田中さんは祖父母に可愛がられて育った。仕事で「もし自分の祖父母やったら、両親やったら（藤原さん）」と思うのだというし、看護師の吉村さんも自宅で介護をされているので、両者の立場からものを考えられるようである。

兼田さんは在宅の高齢者を訪ねた時、仕事の話は要点だけを押え、後の時間の殆んどは世間話をしていく事もあるという。高齢者と話すのが楽しいと思えるのと同時に、世間話を通して何でも話し合える関係を創る事を大切にしているようだ。

社会福祉士でセンター長の山本栄二さんは「自分達は仕事を終えたらそれでいいかもしれないけど、問題を抱えた当事者や周囲の方達はいつも心配事があるわけです。その中で自分達に出来る事は、話を聴かせて頂く事で落ち着く場合もあるし、いろんな社会資源につなげて、その方々が少しでもホッとして落ち着く事が出来ればと思うんです。それぐらいしか出来ないんじゃないかな。問題のある方も自分も一緒です、条件がそうなければ自分も相手の立場なら悩むでしょう」。多種多様なケースの相談に対応し、多忙な現場である。

仕事で辛い事は「制度側である保険者と利用者や事業者との板ばさみになる事（田中さん）、制度の中で出来る事とできない事を言う時（山本さん）」という。逆にうれしい事は「待ってたよ！」と言ってもらえた時だ。

最後に「介護で疲れてしまう前にどうぞ気楽にお立ちより下さい（吉村さん）」。（李 章根記）

表紙写真に寄せて

ラミーカミキリ

井手

泉

エメラルドがかかった涼しげな白地に、ピロロドの様な黒の紋様のコントラストが美しい、どこもなく南国的な風情のあるラミーカミキリ。写真は自宅の庭のムクゲの葉をかじっているところを撮りました。その様子や円い食痕がわかりやすいように拡大してあります。実物の体長は11〜17ミリで変異に幅がありますが小粒ですから、実際に見た印象はもつと可憐で、軽やかで爽やかな感じがします。からだの模様にも変異があり個体によって少しずつ皆ちがっています。

ラミーカミキリはカミキリムシの仲間で、植物の繊維や木質を咬み切ったり砕いたりするのに適した固くて鋭利なアゴをもっています。その名前(和名)は、この昆虫の食草であるラミー(イラクサ科の多年草「カラムシ」の大型のもの)に由来します。ラミーは茎の繊維が長くて丈夫で水に強いので、古来、漁網やロープや上布などに用いられ、中国や日本でも早くから栽培されてきました。原産地は中国の南部、ジャワ、スマトラなど熱帯地方です。一方のラミーカミキリも元来は南方系の昆虫で、原産地は台湾や中国南部といわれています。それが日本にいつ頃から棲み着いたのか、一説によれば江戸時代に長崎から入ったものが徐々に分布を拡げた、とされています。ところで余談ながら、長崎は私の幼少年時代を過ごした故郷です。しかも当時は山野を駆けまわった昆虫少年でしたから、ラミーカミキリは至る所でよく見かけたものです。そのためラミーカミ

キリと言えば当時の長崎を思い出すほど、特別な因縁のある昆虫の一つなのです。この写真を撮影したのは一九九六年(平成八年)で、その時の本種との出逢いは実に半世紀ぶりの突然の再会でしたので、タイムスリップしたような驚きと強烈な懐かしさに打たれました。

さて、この再会を機に、本種はいつ頃から奈良に生息するようになったのかという思いがつのり調べてみたくなりました。それから間もなくのこと、奈良市大柳生の道端でカラムシに多数集まっているラミーカミキリに出逢い、それによって奈良市内にはすでに定着していたことを知らされました。その後、ある研究者たちの一九九八年の調査結果から、天理市、吉野町、大塔村、大阪府金剛山、三重県白山町からの記録と、さらに和歌山県にも侵入し南下中であること、及び関東地方の東部や標高の高い地域でも記録されていることがわかりました。

それから十二年が経った現在、吉野町上市のカラムシの群落を調べたところ、至る所でラミーカミキリが多数発生していることを再確認しました。また友人の話では京都府の北部でも見られるとのこと。この様な激しい分布拡散の要因は気候の温暖化によることは明らかで、ちなみにナガサキアゲハその他の南方系のチョウ(蝶)の北上定着とも時を同じくしています。

読者の方々にはどうでもよい話でまことに恐縮なのですが、ラミーカミキリの現時点での分布状況をもう少し詳しく知りたいので、もし興味のある方がおられたら、カラムシやムクゲ、あるいはフヨウを探してみてください。そしてこれらの葉上や周辺にラミーカミキリがいたら、発見場所と年月日を下記へご一報頂ければ大変有りがたいで

す。(奈良市川上町八七三―一三九 電話〇七四二―二七―二二〇 井手)。

なお、見つけたラミーカミキリは殺さない方がよいと思います。本種は前記の植物に寄生し幼虫がそれらの茎、あるいは枝や幹などを食べるいわば害虫で、ルーツをただせばいわゆる移入種でもありますが、だからと言って殺虫剤などで駆除しようとしても間に合いませんし、虫は嫌いだという理由で殺すのもいけません。そもそも彼らに罪はないのですから。むしろ人類発生のはるか以前から自然全体の秩序を支えてきた無数の生きものの中の一つで、それが気候の変動に従っているだけ。とにかく害虫といえども人間では作れない尊い命です。それは、地球にとつての新参者で害獣である私たちの命も尊いと同じことですから、余ほどの問題や人の命に関わる危険がなければ、極力殺生はさける方が賢明だと思います。人も虫も仕合せにという祈りなしには、環境問題も真の解決はあり得ないでしょう。

丁度今ごろ(五〜七月)ラミーカミキリの成虫が発生する時節です。今年も庭のムクゲに可憐な姿を見せ、葉や小枝をかじったり葉かげで無心に交尾をしたりしています。そこには、わるがしい人間のこしらえたものではない、真に神聖な、かんながらの命の喜びと光があります。(合掌)

【おぼろげ】 最近、食料品やガソリンといった物の値段が見る見るうちに値上がりします。生活防衛のために、いや地球環境保護のためにエコ運転に努めたり、より安いパッケージ品を求めていつもとは違うスーパーへも足を伸ばしたり……。いやまてよ、足を伸ばして遠くへ行くということは、家計には優しいけれど、やっぱり地球環境に良くないことなのではないでしょうか? (矢追明昌)

A W T C 日誌

5月11日 祝会。昭和38年4月23日の法話を聞き、考えました。
 5月14日 この夜、8時頃拝殿の奥で初めてホトトギスの声が聞こえたとのこと。

5月15日 大倭神宮月次祭。
 大倭病院では「看護の日」のイベントとして、健康診断や健康相談が行われ、193名の参加者がありました。



5月17日 夜、交流の家でFWC定例委員会。今夏の盛りだくさんの活動計画について話し合いました。

5月18日 第298回大倭会文化行事に24名が参加。大阪中之島の適塾見学と昼食会でした（詳細は7月号で報告）。

5月23日 大倭大本宮月次祭。
 この日は昭和38年5月23日

次祭の法話テープをお聞きしました。
 『おおやまと』5月号発刊。

昇ちゃん文化行事案内が大の楽しみ、コロッとご機嫌になりました（また毎日毎時毎分クルクル変わりますが）。

5月31日〜6月1日 杉本順一・志津女夫妻、中村俊哉 千久佐夫妻と関西棋院の中野泰宏さん（本紙編集部と有志の皆さん）が岡山の長島愛生園へ行ってきました（5頁参照）。

6月6日 大倭神宮月次祭。
 夜、大倭会館で邑倭の会。

6月7日 薄ぐもりの好天の下、東京や京阪神各地から、子供も含め30数人の参加者が田植えをしました。順調で居過ぎには、恒例の宴会。田んぼのオーナー北川俊秋さんは療養中で、息子の善明さんと孫の博規さんが活躍してくれました。



6月8日 祝会。6月は12月と共に大祓いの月、繰り合わせて参加という人もありました。

大倭安宿苑では

5月10日 法人成立52周年記念式典。今年は、新設の茂毛路園あじさいホールにて行い、グラウンドピアノの生演奏で国歌斉唱しました。各施設ともバイキング形式のご馳走でお祝い。
 5月14日 監事監査。
 5月19日 評議員会並びに理事会が行われました。

（菅原園）

5月25日 奈良県障害者スポーツ大会に3名出場、大会新記録や金メダルを獲得しました。

（須加宮寮）

5月21日 希望食事で、好きな物を外注しました。

（長曾根寮）

5月16日（デイサービス）外出会。花のまちづくりセンター、ふろーらむの園内一杯の花に喜んでおられました。
 5月24日 喫茶倶楽部あじさ

い。ボランティア全員で鳴子踊りを披露して下さいました。

（八重垣園）

5月22日 4月 5月に入居された方々を囲んで茶話会。
 5月28日 ならまち振興館へ「幻の大仏鉄道展」の見学に。投句箱より 「でんで虫今年も逢ひし万歩計」「紫陽花の甘い香りや日射し暑く」「柿若葉雨のしずくに風そよぐ」

俳句の風物 上田森彦（98歳）
 地下鉄の青きシートや単物



中村汀女
 街は真夏だが、地下鉄は空いている時間。座席の青が単衣に沁みるように爽やか。些細な体験の中の季節感で有名。

地下鉄から出た方向音痴に街路樹青葉（自由律） 森彦
 6月5日 ピアノの伴奏で、第1回目の「ピアノでうたおう」開催。（写真上）

A T M i C

★月次祭（大倭神宮）
 7月6日（日） 午後2時より大倭神宮にて。

★大倭会主催第四七五回祝会
 7月13日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

★月次祭（大倭神宮）
 7月15日（火） 午後2時より大倭神宮にて。

★月次祭（大本宮）
 7月23日（水） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

日んぼ通信
草取りのご案内
 今年も草取りに皆さんのお力をお借りしたいと思います。よろしくご助力下さい。
6月29日（日）
午前9:00～（雨天決行）
 ＊午前中を予定しています。
 ＊泥で汚れてもいい服装で。（着替え、タオル各自で準備）
 ＊軍足・飲み物は用意します。
 連絡先：玄徳院
 TEL 0742-41-4615

第32回
水俣安宿苑
夏まつり
7月26日（土）
午後3時～
あすか駐車場にて
 お問合せ/安宿苑事務局
 TEL 0742-48-3221
 不用品リサイクルも行いますので、いつもながらご寄贈のほどよろしくお願ひします。